

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	高知県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	大方町立入野小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	2	1	3	10	16
児童数	36	34	40	32	50	32	3	227	

II 研究の概要

1. 研究主題

一人一人の“わかる”“できる”“やってみよう”をめざして

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年国語（観点別到達度学力検査の結果から基礎基本の確実な定着ができていないため）
 全学年算数（観点別到達度学力検査の結果から基礎基本の確実な定着ができていないことと当該教科の研究を過年度から継続しているため）

(2) 年次ごとの計画

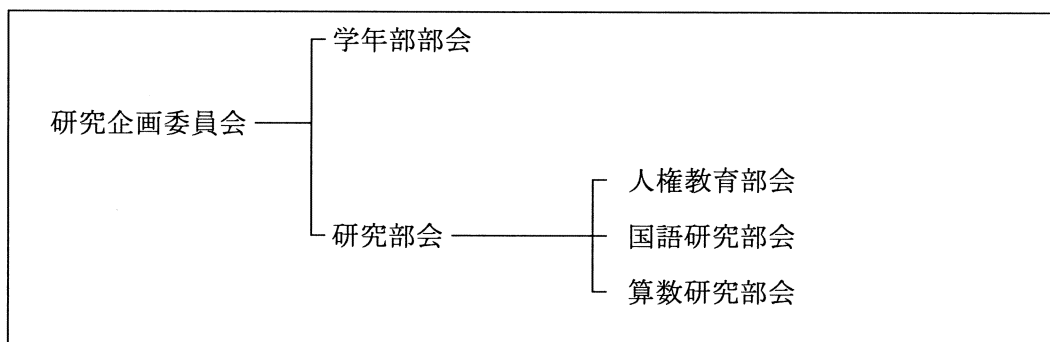
平成 14 年度	<ul style="list-style-type: none"> ○テーマ 一人一人の“わかる”“できる”“やってみよう”をめざして ○仮説 <ul style="list-style-type: none"> ①指導体制や方法、教材の工夫改善をすることで、学習意欲が高まり学力の向上が図られるだろう。 ②評価を指導に生かした授業改善により、学力の向上が図られるだろう。 ○研究内容・方法 <ul style="list-style-type: none"> ①研究体制の確立 研究主題を設定し、研究内容や研究方法を明らかにし、研究の全体構想を策定する。 ②教科経営案の作成 実施教科の研究目標・経営案を作成し、具体的な手立てを共通理解する。 ③指導計画の作成 単元や内容毎に指導体制・方法についての計画を作成する。 ④評価規準の作成 単元や内容毎に評価規準を作成し指導に生かす。 ⑤校時表の改善 生活リズムを整えると共に、読書、漢字、計算の継続的な習熟を図る取り組みを行う。 ⑥教材の工夫 単元毎に教材を蓄積する。 ⑦実態調査 観点別到達度学力検査を実施し、本校の課題を確認する。 九九・基礎計算テストを定期的に行い定着状況を継続的にみる。
----------------	---

平成 15	<ul style="list-style-type: none"> ○ テーマ 一人一人の“わかる”“できる”“やってみよう”をめざして
----------	--

年 度	<p>○ 研究の見通し 昨年度からの取り組みを継続しながら、今年度は「指導と評価の一体化をより具体化するために、従来の通知表とは別に二学期より単元毎の通知表ともいえる「単元のあゆみ」、また基礎学力の通知表ともいえる「読み書き計算のあゆみ」を発行することにした。そのことにより、子どもの学びの姿の実態認識の共有化と授業改善の促進、基礎学力の充実を図ろうとした。</p> <p>また、「学力向上は授業改善から」という考えに立ち、授業研究の工夫改善と授業改善レポート報告会の実践を通して相互に学び合うことで授業改善を図ろうとした。</p> <p>○ 研究の内容・方法</p> <p>①「単元のあゆみ」の発行 「単元のあゆみ」は指導と評価の一体化の具体的手立てとして、評価のサイクルを単元という短いスパンで行い、子どもの学びの姿の実態認識の共有化を行うと共に、その後の評価に生かしていくものである。</p> <p>②読み書き計算のあゆみ 「読み書き計算のあゆみ」は、基礎学力の定着度を同一学期に同一内容で定点観測しながら、定着の度合いを指導に生かすための尺度の導入の取り組みである。繰り返し学習による伸び率を子どもの自信や意欲に繋げていきたいと考えている。</p> <p>③指導案形式、研究授業の工夫改善 改善点の一つとして、授業の視点を明確にすることにした。わかる喜び、できる楽しさ、やってみようという意欲の喚起には、多様なアプローチの方法があると考え、大きく分けて三つのパターンを試みることにした。 研究授業においては、参観者が児童一人一人に目を配り、観察できるように、児童座席表を手渡している。そして、その授業後には、そのメモを基にして一人一人の児童の実態や事例等についての研究協議を行っている。また、児童による授業評価表の改善としては、学習内容も取り入れた評価項目を設定することにより、形成的評価として活用している。</p> <p>④授業改善レポート報告会 授業改善にどのように取り組んできたのか、1月に授業改善レポート報告会を行った。一人一人の子どもに視点を置き、特に具体的にどのような手立てをして改善しようとしていったのか各自の取り組みを報告し合い、研修を深めることができた。三学期の取り組みについても3月にレポート報告会を行う予定である。</p>
--------	--

平成 16 年度	<p>○ テーマ 一人一人の“わかる”“できる”“やってみよう”をめざして</p> <p>○ 研究の見通し 国語や算数という教科だけでなく、心の教育を含めた総合的観点から、本校が捉える学力観に立って、子どもの学力を育む必要がある。</p> <p>○ 研究の内容・方法</p> <p>①「単元のあゆみ」の発行 「単元のあゆみ」の改善を行い、授業改善に生かしていくとともに子どもの学びの姿の実態認識の資料として活用し、学校改善に生かす。</p> <p>②読み書き計算のあゆみ 継続的な定点観測を行い、基礎学力の充実に努める。</p> <p>③授業改善レポート報告会 学期に1回以上は、それぞれの実践に基づくレポートを作成し、授業改善の具体的手立てについて学び合う。</p>
----------------	--

(3) 研究推進体制



III 平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

- ・「単元のあゆみ」の導入により、評価規準、数値的な目標を明確に持って授業に取り組むようになり、特にCRTでCと判定された児童への対応がよりきめ細かになってきた。また子どもを見る目や関わり方が変わってきた。
- ・「読み書き計算のあゆみ」の取り組みによって、基礎学力の定着度を定期的に把握することができ、そのことによって個に応じた指導の有効性が高まった。
- ・「単元のあゆみ」や「読み書き計算のあゆみ」それぞれのあゆみに数値化を導入することによって到達レベルが明確になり、児童の学習意欲が高まってきた。また、「単元のあゆみ」の自己評価欄の記入を通して、自己評価力が高まってきた。
- ・保護者へのアンケートの結果、子どもの学習状況や到達状況が分かり易いという高い評価を得ることができた。
- ・県外講師による公開授業を参観し、授業改善の具体的な手立てを学ぶことができ、学級の実態に応じて学んだことを生かすことができた。
- ・研究授業や公開授業を通して自らの実践を開くことにより、自分自身の授業を多面的に振り返ることができ、子どもの実態に応じた授業改善に繋げることができた。
- ・授業改善レポート報告会を開くことにより、具体的な取り組みを学び合い、その手立てを実践に生かすことができた。

2. 今後の課題

- ・「単元のあゆみ」を授業改善にどう生かしていくのか、「単元のあゆみ」をよりよいものに練り上げていくための改善点などについて、職員が意見を交流し合う場を今以上に持つ必要がある。
- ・国語や算数という教科だけでなく、心の教育を含めた総合的観点から、本校が捉える学力観に立って、子どもの学力を育む必要がある。
- ・定期的に授業研究に参加してもらえる先生と連携をとるなど、外部の視点を取り入れた授業研究をさらに深めていきたい。

IV 学力等把握のための学校としての取組

- ①観点別到達度学力検査の実施（年1回年度末）
- ②継続的な学力向上の取り組みを検証するために、学期毎の国語、算数の単元毎の通知表「単元のあゆみ」の作成
- ③基礎学力の読み書き計算検定の実施（学期毎に3回以上）

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 14年度 説明会（10月10日、保護者対象説明会、授業公開）
- 15年度 中間発表会（11月30日、授業公開、実践発表）
研究に関わる資料をHP上に公開する、（1月）

高知県学力向上推進協議会で実践発表（2月）
大方町内の広報誌に取り組みを紹介（3月号）
16年度 研究発表会（12月上旬予定、授業公開、研究発表）

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無